

東洋文化研究所紀要 第169冊
平成 28 年 3 月 抜 刷

「インドの仏」展に出品された
『八千頌般若経』装飾写本について

田中 公明

「インドの佛」展に出品された 『八千頌般若経』装飾寫本について

田中 公明

(1) はじめに

2015年3月17日から5月17日まで東京国立博物館で開催された「インドの佛」展に出品されたインド博物館(コルカタ)所蔵の『八千頌般若経』装飾寫本(以下インド博本)は、多数の密教仏の細密画を含む点で注目値する。インド博から提供された資料では、本寫本はパーラ朝時代のヴァレンドラブーム製となっていた。しかし筆者は、寫本の写真を一見して、これが2011年に調査したバングラデシュのヴァレンドラ研究博物館 Varendra Research Museum 所蔵の『八千頌般若経』装飾寫本に欠落していた残余のフォリオであることに気づいた。

インド博本はヴァレンドラ研究博物館所蔵本(以下ヴァレンドラ本)に欠落していた12葉のうち10葉で、ヴァレンドラ本の奥書には、ネパールで書写されたと明記されている。また残余のフォリオについては、ベナレスの Jñānapravāha Centre に1葉存在することが明らかになっている⁽¹⁾。

ヴァレンドラ本については、2010年に龍谷大学アジア仏教研究センターが調査を行っている⁽²⁾。さらに2012年には、ドイツの Gudrun Melzer とオーストリアの Eva Allinger によって、奥書のローマ字転写と独訳が発表された⁽³⁾。しかし、本寫本の最大の特徴である密教仏の細密画については十分な検討が加えられていない⁽⁴⁾。本稿では、主として細密画の図像解析を通じて、本寫本

の性格を明らかにしたい。

(2) 『八千頌般若経』装飾写本について

『八千頌般若経』*Aṣṭasāhasrikā-prajñāpāramitā-sūtra* は、数多い大乘仏典の中でも最も基本的なテキストの一つである。漢訳には数種あるが、わが国では鳩摩羅什訳『小品般若経』(大正 No.227) が親しまれている。

本経のサンスクリット写本はネパールを中心に数多く発見されているが、インドのパラ朝にまで遡りうる貝葉写本は、稀である。井ノ口泰淳が1971年に調査した時点では、パラ朝あるいはそれと同時代にネパールで書写された『八千頌般若経』の貝葉写本は、カタログに記載されているものだけで17部存在し、このうちパラ朝の紀年を有するものは9本あった⁽⁵⁾。その後、チベット自治区や欧米のコレクションから梵語仏典の貝葉写本が多数発見され、キム・ジナの研究によれば、パラ朝の紀年⁽⁶⁾を有する『八千頌般若経』の写本は23本、セーナ朝の紀年を有するものが1本となっている。ただしキムのリストには、本稿で取り上げるヴァレンドラ研究博物館の2本は含まれていない⁽⁷⁾。

(3) ヴアレンドラ研究博物館所蔵の『八千頌般若経』について

ヴァレンドラ研究博物館は、東ベンガル(現バングラデシュ)を代表する博物館で、現在はラージシャーヒ大学が管理している。同博物館が所蔵するサンスクリット写本については、Sachindra Nath Siddhanta が編集したカタログが刊行されている⁽⁸⁾。それによれば、同博物館には『八千頌般若経』のサンスクリット写本が2本所蔵されている。このうちNo. 689 はハリヴァルマン王即位19年の紀年をもつ191葉の貝葉写本で、6葉に細密画がある。これは井ノ口

「インドの佛」展に出品された『八千頌般若經』裝飾寫本について

が紹介した写本の(16)パネルジー所持本に相当すると思われる。なおハリヴァルマンは、パーラ朝に服属していた東ベンガルの王と考えられ、11～12世紀に遡りうる写本である⁽⁹⁾。また他の写本がネパールから請来されたものであるのに対し、本写本は東ベンガルの仏教徒に伝えられた可能性がある点でも貴重である。

いっぽう本稿で取り上げる No.851 は、多数の細密画を含み貴重な写本である。Siddhanta 1979によると、本写本は Nepal Saṃvat 393 年 ≡ 1273 AD⁽¹⁰⁾、サダーシヴァマツラ Sadāśiva Malla 王の治世に書写されたことになっている。しかし Sadāśiva Malla の治世は 1574-1580 AD⁽¹¹⁾ であり、奥書の紀年と一致しない。これに対して吉崎一美の解説によると、紀年は 393 ではなく 696 年⁽¹²⁾ ≡ 1576 AD であり、Sadāśiva Malla の治世と合致する。

また吉崎は、本写本の奉献者である Śākya bhikṣu śrī Haku-ju の名が、カトマンドゥ盆地で書写された *Āryatārā-sragdharā-stotra* (Nepal Saṃvat 678 ≡ 1558 AD) の奥書にも現れることを発見した。また彼が、スヴァヤンブー仏塔に傘蓋を寄進したことも知られている。したがって奥書の記述を信じる限り、本写本は 16 世紀にカトマンドゥ盆地で書写されたことになる。ところがネワール語の奥書が記された第 531 葉は、第 530 葉までとは別人の筆になっている。

fol. 530b は、写本の末尾に記される如来法身偈 *ye dharmā hetuprabhavā hetun teṣān tu//* で中断し、531a は、*śreyo 'stu// saṃvat 696* と、前フォリオの末尾を承けずに開始されている。貝葉写本では、冒頭と末尾のフォリオは、木製の経板に直接触れるため傷みやすく、修復時に新たなフォリオに交換された可能性がある。

13 世紀初頭に組織的な仏教がほぼ壊滅してしまったインドとは異なり、ネパールでは現代まで、伝統的な大乘仏教と密教の混淆形態が信奉されてきた。サンスクリット写本についても、度重なる読誦によって老朽化した写本の修復 *Jirṇoddhāra* がしばしば行われたので、Nepal Saṃvat 696 という年紀は、当初

の奉獻銘を、そのまま転写したのではなく、修復銘である可能性がある。そのため Melzer & Allinger 2012 は、本写本をパーラ朝時代にインドで書写された写本に分類している。

(4) 細密画の内容

それでは本写本最大の特徴である、密教仏を描いた細密画の構成を考察してみよう。

本写本では、『秘密集会』阿闍金剛(インド博本 28b:写真1)と、その妃触金剛女(ヴァレンドラ博本 29a:写真2)、カパーラダラ・ヘーヴァジュラ Kapāladhara-Hevajra(ヴァレンドラ本 98b)とナイラートミヤー(インド博本 99a)のように、向かい合うフォリオの裏面と表面の中央に、配偶関係にある男女尊を描いた例が多い。

このうち表面に描かれた尊格は、ほとんどが女性尊であり、文字の向きとは逆に描かれている。これは貝葉写本の挿画としては、きわめて異例である。これに対して裏面に描かれた尊格は男性尊であり、文字と同じ向きに描かれている。これは写本が閉じられたとき、男女の尊格が男女合体の仏、父母仏 yab yum になるように設計されたものと思われる⁽¹³⁾。

この推定は、八臂不空羅索観音(ヴァレンドラ本 255b)と二臂弥勒菩薩(ヴァレンドラ本 256a)のように、裏面と表面の尊格が、ともに男性尊で、配偶関係にない場合は、表面に描かれた尊格が逆さまに描かれていないことから裏げられる。いっぽう 173b は、裏面に1面12臂の女性尊を文字の向きとは逆に描き、174a では、1面12臂の男尊を文字と同じ向きに描いている。後期密教には、『秘密集会』ジュニャーナパーダ流の四仏母や六金剛女のように、男性の配偶者を伴う女性尊がある⁽¹⁴⁾。173b では女性尊を主尊とし、174a の男性尊は配偶者として描かれたのであろう。

「インドの佛」展に出品された『八千頌般若經』裝飾寫本について



写真1 「インドの仏」展公式図録より



写真2 By courtesy of Varendra Research Museum

このような男女合体尊は、灌頂を受けていない一般信徒に公開することが禁止されていた。筆者が調査したパーラ朝時代に制作された父母仏の彫像でも、そのほとんどは妃を伴わない単独像として造像されている⁽¹⁵⁾。

近代に入ると、チベット・ネパールでも、このようなタブーは忘れられ、顕教經典にも父母仏を描いたものが見られるようになるが、本作品成立の時点では、『八千頌般若經』のような顕教經典に、男女合体尊を描くことはできなかった。そこで写本を閉じた時、裏面の男性尊と次頁表面の女性尊が合体するよう、配慮して描かれたと推定される。

いっぽう配偶関係にある男女尊の図像を検討すると、前述の『秘密集會』阿闍金剛と、その妃触金剛女は、ともに3面6臂で、両者の身色が青色でなく白色を呈することを除いては、インド成立の儀軌に説かれる正統的な図像となっている。

ところがインド博本 90b に描かれた1面24臂の男性尊は、胴体が青色であるにもかかわらず、右足は赤、左足は白に塗り分けられている。(写真3)このように左右半身で身色が異なる守護尊は、カーラチャクラ Kālacakra とダーカールナヴァ Dākārṇava、つまり『ダーカールナヴァ・タントラ』所説のヴァジュラダーカ以外には見あたらない。このうちダーカールナヴァは、左右半身の塗り分けが青と緑で、面臂の数も17面76臂⁽¹⁶⁾となるから、本作品とは一致しない。これに対してカーラチャクラは4面24臂で、右足が赤、左足が白となるから、面の数と腕の塗り分け⁽¹⁷⁾を除いては一致する。もしこれをカーラチャクラとするなら、対面する11aに描かれた女性尊は、カーラチャクラの妃ヴィシュヴァマター Viśvamātā でなくてはならない。ところが『時輪タントラ』の大註釈『ヴィマラプラバー』に説かれるヴィシュヴァマターは、身色黄金色の4面8臂像である⁽¹⁸⁾。

これに対してヴァレンドラ本 11a に描かれた女性尊は、身色青色で1面10臂である。(写真4)後期密教の守護尊には、種々の異像が存在する場合が多い

「インドの佛」展に出品された『八千頌般若經』裝飾寫本について



写真3 「インドの仏」展公式図録より



写真4 By courtesy of Varendra Research Museum

が、『時輪タントラ』に関してはシャンバラのプンダリーカ王に帰せられる『ヴィマラプラバー』が絶対的な権威をもっており、同書に説かれる図像以外の異像は存在しない⁽¹⁹⁾。

さらに98bに描かれる3面24臂4足の男性尊は、手に種々の持物をもっており、器杖を持つヘーヴァジュラ Śastradhara-Hevajra と思われるが、儀軌に説かれる9面16臂4足像とは一致しない。また妃のナイラートミヤーは1面2臂であるが、99aには12臂像が描かれている。さらにこれ以後、134bから234aまでに描かれる6組の父母仏に関しても、儀軌に一致しない点が多く認められる。

このように本作品に描かれる挿画には、インド成立の文献に基づかない異例ともいえる図像が、かなりの数存在することが分かった。このような破格は、インド以来の伝統を墨守する傾向が強いチベット仏教(ニンマ派の埋蔵教法を除く)には、ほとんど見られない。

(5) 細密画の対照表

それでは以下に、ヴァレンドラ本とインド博本のフォリオと細密画の対照表と掲載することにする。最初の番号は、Siddhanta 1979の挿画番号である。「図録」の項目は、「インドの仏」展の公式図録 Indian Buddhist Art, From Indian Museum, Kolkata, Tokyo 2015の図版番号、「写真」はヴァレンドラ研究博物館所蔵のデジタル写真のファイル名、「向き」は挿画と文字の向きの順逆を示している。

「インドの佛」展に出品された『八千頌般若經』裝飾寫本について

ヴァレンドラ寫本とインド寫本の対照表

	fol.	図録	写真	向き	尊 格
1.	1b		IMGP7304	順	触地印如来
2.	2a		IMGP7310	逆	般若仏母
	28b	IM.68		順	『秘密集会』阿闍金剛
3.	29a		IMGP7339	逆	触金剛女
4.	44b		IMGP7356	順	ヘーヴァジュラ
	45a	IM.60		逆	ナイラートミヤー
	90b	IM.61		順	カーラチャクラ
5.	91a		IMGP7409	逆	ヴィシュヴァマター？
6.	98b		IMGP7418	順	3面 24 臂 4 足ヘーヴァジュラ
7.	99a		IMGP7421	逆	3面 24 臂 4 足ナイラートミヤー
8.	134b		IMGP7459	順	3面 16 臂ヘーヴァジュラ
9.	135a		IMGP7463	逆	3面 16 臂ナイラートミヤー
10.	173b		IMGP7504	逆	1面 12 臂の女尊
11.	174a		IMGP7507	順	1面 12 臂の男尊
12.	188b		IMGP7522	順	3面 12 臂の男尊
13.	189a		IMGP7526	逆	ナーロー流のダーキニー
14.	201b		IMGP7543	順	1面 12 臂の男尊
15.	202a		IMGP7543	逆	ナーロー流のダーキニー
16.	209b		IMGP7554	順	3面 12 臂のサンヴァラ
17.	210a		IMGP7554	逆	ヴァジュラヴァーラーヒー
18.	233b		IMGP7590	順	1面 12 臂のサンヴァラ
19.	234a		IMGP7590	逆	1面 12 臂のヴァーラーヒー
20.	255b		IMGP7614	順	8 臂不空罽索観音
21.	256a		IMGP7614	順	2 臂弥勒菩薩
22.	280b		IMGP7640	順	1面 12 臂 1 足の男尊
23.	281a		IMGP7640	逆	1面 12 臂 1 足の女尊
24.	288b		IMGP7649	順	1面 12 臂のサンヴァラ
25.	289a		IMGP7649	逆	1面 12 臂のヴァーラーヒー
	296b	IM.64		順	1面 8 臂赤色の男尊
26.	297a		IMGP7657	逆	1面 8 臂赤色の女尊
	310b		欠		

	fol.	図録	写真	向き	尊 格
27.	311a		IMGP7671	逆	1面9臂3足の女尊
28.	326b		IMGP7688	順	ヴァジュラバイラヴァ
	327a	IM.59		逆	1面16臂4足黄色の女尊
29.	345b		IMGP7709	順	1面8臂の男尊
30.	346a		IMGP7709	逆	1面8臂の女尊
	356b	IM.66		順	1面4臂の男尊
31.	357a		IMGP7722	逆	赤色ヴァーラーヒー?
32.	388b		IMGP7758	順	1面4臂の男尊
33.	389a		IMGP7758	逆	1面4臂の女尊
34.	400b		(欠)		
35.	401a		IMGP7770	逆	赤色ヴァーラーヒー?
36.	418b		IMGP7789	順	1面10臂の男尊
37.	419a		IMGP7789	逆	1面8臂の女尊
38.	425b		IMGP7800	順	1面8臂の男尊
39.	426a		IMGP7800	逆	1面8臂の女尊
40.	435b		IMGP7814	順	1面10臂赤色の男尊
41.	436a		IMGP7814	逆	1面6臂赤色の女尊
42.	445b		IMGP7824	順	1面10臂青色の男尊
43.	446a		IMGP7824	逆	1面4臂赤色の女尊
	458b	IM.63		順	1面12臂白色の男尊
44.	459a		IMGP7842	逆	1面2臂白色の女尊
45.	477b		IMGP7866	順	1面6臂青色の男尊
	478a	IM.65		逆	1面6臂青色の女尊
	482b	IM.67		順	1面8臂白色の男尊
	483a		欠		
	512b	IM.62		順	1面10臂黄色の男尊
46.	513a		IMGP7906	逆	1面10臂黄色の女尊
47.	527b		IMGP7925	順	1面6臂ヤマーンタカ
48.	528a		IMGP7925	逆	1面6臂の女尊
49.	530b		IMGP7934	順	黄色ジャンバラ

(6) 本写本の成立地と成立年代

(2) で見たように、パーラ朝あるいはそれと同時代のインドの紀年をもつ『八千頌般若経』貝葉写本は、20本近く現存することが判明した。しかし挿画の大半は、仏伝八相、『般若経』自体の尊格化である般若仏母、般若智を象徴する文殊菩薩、一切如来の口密を象徴するとされる阿弥陀如来など、通仏教的なモチーフで占められ、本写本のように、全巻が密教仏の細密画で飾られるものは稀である。

その中で、ベナレス・ヒンドゥー大学(BHU)が所蔵するセーナ朝のラクシュマナ・セーナ王47年(1226 AD 前後)⁽²⁰⁾の紀年を有する『八千頌般若経』貝葉写本は、密教仏の挿画を多く含む点で注目に値する。さらにカーラチャクラとヴィシュヴァマター、ヘーヴァジュラとナイラートミヤーなど、通常は父母仏となる男女尊を対面するフォリオに配する点も、本写本と共通している。しかしBHU写本に描かれたカーラチャクラが、儀軌の規定どおりに24臂を8臂ずつ青・赤・白に塗り分けているのに対し、インド博本のカーラチャクラには、白色の2臂と儀軌に一致しない黄色の2臂を除いては、すべて青色に塗られている。このように本写本に見られる正統的図像からの逸脱は、セーナ朝の紀年をもつ13世紀の作品に比しても著しいといえる。

なお大正大学所蔵の『八千頌般若経』写本は、本写本と同じNS. 696 ≐ 1576 ADの紀年をもち、冒頭の4葉と末尾の5葉が別人の筆になるという興味深い事例だが、縦横比が5.5 × 58.0cmと10倍以上となり、字体の点からも、パーラ朝もしくは同時期のネパール写本を、16世紀に修復したものと考えて差し支えない⁽²¹⁾。これに対して、本写本の縦横比は、ほぼ5倍であり、パーラ朝の紀年をもつ他の写本に比して明らかに短い。筆者がネパールで留学中に得た情報によれば、縦横比が7～10倍にもなる横長の貝葉には古写本が多いのに

対し、横幅が短い貝葉には時代が下がるものが多い。これはネパールでも、かつては南インドから輸入したターラ樹葉を用いていたが、中世にはネパール国産の代用品が現れ、長大な樹葉が確保できなくなったからといわれている。

ヴァレンドラ本末尾の奥書が、本写本成立の事情を記録したものかについては、さらなる検討が必要であるが、本稿で明らかにした諸事実は、本作品がパーラ朝治下の東インドではなく、セーナ朝あるいはそれ以後のネパールまで下がることを示唆するものといえよう。

(7) おわりに

以上の考察をまとめてみよう。

1. 「インドの仏」展に出品されたインド博物館所蔵の『八千頌般若経』装飾写本は、ヴァレンドラ博本に欠落していた12葉のうちの10葉である。
2. インド博物館は、11世紀のヴァレンドラ・ブーミ派の作品と主張しているが、ヴァレンドラ博本の奥書は、16世紀にネパールで書写されたことを示している。ただしこれが本来の奥書の転写なのか修理銘であるのかについては、今後慎重に検討しなくてはならない。
3. 挿画は向かい合うフォリオの裏面と表面の中央に描かれている。
4. このうち表面に描かれた尊格は、ほとんどが女性尊であり、文字の向きとは逆に描かれている。これに対して裏面に描かれた尊格は男性尊であり、文字と同じ方向に描かれている。これは写本を閉じたとき、男女の尊格が男女合体の仏、父母仏になるように設計されていたと思われる。
5. 男女尊の図像を分析したところ、パーラ朝時代の文献に基づかない異例の図像が、数多く見られることが分かった。また貝葉の長さも、パーラ朝のものに比して短い。これは本写本の成立年代が、パーラ朝より下ることを示唆している。

「インドの佛」展に出品された『八千頌般若経』装飾寫本について

パーラ朝は、インドで仏教が栄えた最後の時代に当たる。同時代の仏教美術は、彫刻ではベンガル・ビハール・オリッサを中心に、数多くの作品が遺されるが、絵画に関しては、ほとんど作例が現存していない。その中で仏典の貝葉寫本の挿画は、ありし日のパーラ朝仏教絵画の実態を知る、唯一無二の資料である。ところがわが国では、仏典のサンスクリット寫本が数多く収蔵されるにもかかわらず、この分野の研究が進展していない⁽²²⁾。これはネパール・チベットからわが国に請来された貝葉寫本に、パーラ朝に遡りうる古寫本が少なく、細密画を含んでいないものが多かったためである。

今後は、貝葉寫本の細密画についての関心が、わが国でも高まることを期待したい。

平成 27 年度学術研究助成基金助成金 基盤研究 (C)「インド・チベット密教と曼荼羅の研究」の成果の一部。

- 1 Melzer & Allinger 下掲 3 論文, p.263.
- 2 若原雄昭「バングラデシュ国内に保存されるサンスクリット仏教寫本, 他」(BARC ユニット 1 第 2 回バングラデシュ調査報告)『龍谷大学アジア仏教文化研究センター ワーキングペーパー』No. 11-01, 2011 年。
- 3 Gudrun Melzer & Eva Allinger: Die nepalesische Palmblatthandschrift der Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā aus dem Jahr NS 268 (1148 AD), Teil II, Berliner indologische Studien 20, 2012, 256-260.
- 4 現在, Kim Jinah が, 本寫本を含む南インドの装飾寫本について新たな著書を準備中であるが, 本稿執筆の時点では刊行されていない。
- 5 井ノ口泰淳「梵文「八千頌般若経」のパーラ朝期の寫本について」『三藏集』第 2 輯 (国訳一切経印度撰述部月報, 1975 年) pp.19-26。なお月報としての初出は 1971 年。
- 6 最後の王 Govindapāla が退位した後の紀年を含む。
- 7 Kim Jinah: *Receptacle of the Sacred*, Illustrated Manuscripts and the Buddhist Book Cult in South Asia, Berkeley 2013, TABLE 6-1.
- 8 Sachindra Nath Siddhanta: *A Descriptive Catalogue of Sanskrit Manuscripts in the*

Varendra Research Museum Library Vol.1, Rajshahi 1979.

- 9 Baroda Museum and Picture Gallery にハリヴァルマン王8年の紀年をもつ『二千五千頌般若経』の写本があり、1100 AD 前後と考えられている。(Kim 2013, 217; 223)
- 10 Nepal Saṃvat(ネパール旧暦)は、880を加えると西暦年が得られる。しかしこの暦の1年は、ネパール語でカチャラーと呼ばれる月の1日から始まる。これは西暦の10月下旬から11月上旬に当たるので、年初の2ヶ月前後は西暦では前年に含まれる。しかし閏月の関係で年初が大幅にずれることがあり、換算が面倒である。そこで以下では、Nepal Saṃvat に機械的に880を加えた値に(≐)を付して、対応する西暦年として示した。
- 11 佐伯和彦『ネパール全史』(明石書店、2003年)p.391.
- 12 これはプラチャリタ・ネワリー体の数字6と、ランジャンナ体の数字3の形状が似ているために起こった錯誤と思われる。
- 13 貝葉写本では、文字は表裏で逆向きに書かれている。したがって向かい合うフォリオの裏表に、文字と同じ向きに男女尊を描けば、写本を閉じた時、男性尊の頭と女性尊の足が重なってしまい、男女合体の姿にならない。
- 14 この場合、女性尊が正面を向き、男性の配偶者は背中を向けて描かれる。
- 15 拙稿「ハリプルの四仏について」(『密教図像』第27号、2008年)参照。
- 16 bSod nams rgya mtsho et al: *The Ngor Mandalas of Tibet*, Listing of the Mandala Deities, Tokyo 1991, p.142.
- 17 『ヴィマラプラバー』の所説によれば、カーラチャクラの24臂は8臂ずつ青・赤・白に塗り分けられる。
- 18 カーラチャクラとヴィシュヴァマターの図像に関しては、拙著『超密教 時輪タントラ』(東方出版、1994年) pp.177-179を参照。
- 19 『時輪タントラ』の成立時期と、『ヴィマラプラバー』については、拙稿「カーラチャクラ・タントラーインド仏教の総決算—松長有慶編『インド後期密教(下)』(春秋社、2005年) pp.173-220を参照。
- 20 これも Govindapāla と同じく、即位47年には、すでに死去していたと思われる。
- 21 『大正大学所蔵資料図録・仏教篇』(大正大学出版会、2003年)pp.5-6.
- 22 本分野を扱ったパイオニアの研究としては、真鍋俊照「インド・パーラ朝時代の細密画について(一)(二)」(『三蔵集』第1輯[国訳一切経印度撰述部月報、1975年])が挙げられるが、欧米の先行研究の祖述が多く、ネパール・チベットの情報不足による誤記・誤読等が含まれている。

The Sanskrit Manuscript of the *Aṣṭasāhasrikā-Prajñāpāramitā* Exhibited at the Exhibition “Indian Buddhist Art, From Indian Museum, Kolkata” Held at Tokyo National Museum

by Kimiaki TANAKA

The Sanskrit manuscript of the *Aṣṭasāhasrikā-Prajñāpāramitā* exhibited at the exhibition “Indian Buddhist Art, From Indian Museum, Kolkata” held at Tokyo National Museum from 17 March to 17 May 2015 is worth noting because of the inclusion of many illustrations of esoteric Buddhist deities. According to the data provided by the Indian Museum, this manuscript originated in Varendra-bhūmi under the rule of the Pāla dynasty. However, I immediately realized that it corresponds to missing folios of the Sanskrit manuscript of the *Aṣṭasāhasrikā-Prajñāpāramitā* in the possession of the Varendra Research Museum in Rajshahi, Bangladesh, which I examined in 2011.

The Indian Museum fragment consists of 10 of the 12 missing folios of the Varendra Research Museum manuscript. The Varendra Research Museum manuscript contains a colophon according to which it was copied during the reign of King Sadāśiva Malla in Nepal Saṃvat 696. But the final folio containing this colophon is thought to have been restored at a later date.

The Varendra Research Museum manuscript was examined by BARC, Ryukoku University, in 2010. In addition, Gudrun Melzer and Eva Allinger published a transcription of the colophon and translated it into German in 2012. However, they did not consider the arrangement of the illustrations, a characteristic of this manuscript. In this article, I consider the date and origin of this manuscript mainly with reference to the arrangement and iconography of the illustrations of esoteric Buddhist deities.